



愛隣幼稚園・・・・・・・・・・・・・・・・

園だより

・・・・・・・・・・・・・・・・ 11.7月号

言葉のちから

毎朝の門での「おはよう」の時間は、私の大切なそして大好きな時間です。園長になってからはこの時間だけが唯一、全ての子どもたちと個別に出会える時間になりました。「この瞬間しかない！」そう思っていますから、真剣になります。目も耳も心も研ぎ澄まして一瞬に集中しています。「え～いつもケラケラ笑ってるだけじゃない？」と痛い指摘もいただきそうですが、本人はそう心掛け門に立っています。すると、「おはよう」の一瞬でもそこから子どもたちのたくさんの情報を得られるということがわかってきました。「おはよう」の時間は本当に大切な楽しい時間になっています。

その日の朝もいつもと同じように楽しい時間が過ぎていきました。「おはよう」も終わり、そろそろ門を閉める時間です。園庭を K ちゃんがこちらに向かって走ってきます。「だ～いすき～！」・・・?!・・・一瞬、私はなんのことかわからずにいました。が、どうやらその言葉は私に向けられたものよさだという事に気付きました。すると、何だか心の奥の方が ほわっと 温かくなりました。「私も、K ちゃんだ～いすき！」思わずそう言葉を返し、走ってきた K ちゃんをギュツとして「なんだかうれしくなるね」と言いました。「だ～いすき」の思いがけない一言が、私の心をこんなに温かくするんだということを実感する出来事でした。

まだ10年にはならないかもしれませんが、子どもたちの間でまるで挨拶のように「ウザイ！」「死ね！」という言葉が使われるようになりました。殺伐とした嫌な言葉ですが刺激的な言葉なので子どもたちは魅かれるのでしょうか？あつという間に日常会話に頻繁に使われるようになりました。始めは中学生が盛んに口にしていたのですが、気がつけば小学生も当たり前のように使い始め、そして2,3年前からは幼稚園でもたまに耳にする言葉になってしまいました。初めて幼稚園で「死ね！」という言葉聞いた時には、衝撃を覚えました。ついにきたか・・・そう思いました。しかしその言葉を使っている子どもに言葉の意味を聞いてみると、やはりそれがどんな意味の言葉かという事はわかっていませんでした。テレビやゲームで、あるいは兄弟が頻繁に使うから、刺激的で耳に残るから使っているのです。日本語には人の心を癒す優しい美しい言葉がたくさんあるのに、子どもたちの世界では人の心に突き刺さる冷たい言葉が氾濫しています。研修会でこんな話を聞きました。私たちは、子どもたちが自分の気持ちを表現する言葉を自然に習得すると思っているが、実はそうではないのだそうです。転んで痛いということを感じている時に、そばにいる大人が「ちゃん、痛かったね～」と、気持ちを言葉と繋げてもらうことで初めて「あ～これは痛いということなんだ」ということを知るのだそうです。同じように嬉しい時に「うれしい」、悲しい時に「かなしい」と気持ちと言葉を繋げてもらうことで、口から出る音(ことば)が気持ちを表す意味ある言葉になっていくのだそうです。ただの単語が言葉になり力が宿っていくのです。(そうだ『言霊』という言葉がありました。)あなたの口から出る言葉は、仲間にあなたの思いを伝えます。思いを伝えることである時はあなたが支えられ、ある時はあなたに仲間が支えられる。しかしあなたの口から出る言葉が仲間の心に突き刺さり、傷つけることもある。私たちはそのことを子どもたちに丁寧に根気強く伝えていく責任があります。私たちは子どもたちにどうしても「死ね！」という言葉は口にしてほしくはないのです。

3月12日 震災の翌日 ツイッタ の投稿です。

< 駅員さんに「昨日一生懸命電車を走らせてくれてありがとう」って言ってる小さい子達を見た。

駅員さん泣いてた。俺は号泣してた。 >

どんなに小さい子どもたちでも、こんなに思いのこもった「ありがとう」を言葉にして伝える事ができるのです。仲間を支え、大人をも励ます力のこもった言葉を。